

ヤコブの手紙1章 1-11 節 「信仰を試す」

1A あいさつ 1

1B ヤコブ

2B しもべ

3B 国外の十二部族

2A 忍耐を働かせる信仰 2-4

1B 喜びの態度 2

2B 全き者 3-4

3A 知恵を求める信仰 5-8

1B 惜しめない神 5

2B 疑わない態度 6-8

4A 貧しさにある信仰 9-11

1B 高い身分 9

2B 過ぎ去る富 10-11

本文

これからヤコブの手紙を学びます。ヤコブの手紙は、ヘブル人への手紙のテーマが重なる内容です。それは、「信仰が試される」ということであります。ヘブル書において、同胞のユダヤ人から迫害を受けていた信者たちが、それでも神の約束にしがみついて忍耐することによって、救いを達成します。そしてその忍耐は、自分の内で聖めとなり、平和の義の実を結ぶ成熟へと向かわしめます。このテーマを、ヤコブは冒頭から話していきます。「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。(1:2)」

キリスト者にとって、とても大切な主題です。私たちは救われるだけでなく、救われた後に霊的成熟に向かわなければいけません。そして霊的成熟に至らなければいけません。それによって、初めて救われたことが明らかにされます。その時に大切な要素をヤコブ書は教えてくれています。有名な言葉は、「信仰も、もし行ないがなかったら、それだけでは、死んだものです。(2:17)」成熟した信仰には、十分な、それを裏付ける行ないがあります。その信仰には深みがあります。表面的な信仰の言葉ではなく、実質の伴った、人を動かす力があります。

「日本のキリスト教」(古屋安雄著)という本を今、読んでいますが、そこにアメリカの教会を海の三つの層に分けている教会史の歴史家がいるとのことで紹介されていました。上層は海面、中層は海流、下層は深海となります。海面とは、会場を吹く風、すなわち時代思潮(=時代に流れ)によって、波のように風向きによって激しく左右上下に動揺します。その下にあるのが海流ですが、その時代の思潮に対しては、緩やかな反動しか示さない主流的なキリスト教思想のことだそうで

す。そして、それよりもっと下にあるのが、深海ですが、これはどんなに風が全然動じない民衆の信仰のことだそうです。そして、この教会史の歴史家によると、「教会の生命と言うべき信仰が実際に生きているのは中層と下層、殊に下層の民衆の信仰においてである。」ということです。(以上 20 頁参照)

つまりヤコブ書は、この下層、最も深いところが真の信仰なのだよ、ということをお話しています。表面的に信仰であると私たちが話しているものではなく、その深みがあってこそその真実な信仰であるということです。表面的な信仰からの脱却です。

1A あいさつ 1

ヤコブ書の背景を知るために、1 節にある「あいさつ」を読んでみましょう。1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。

1B ヤコブ

書いた人物が紹介されています。「ヤコブ」です。新約聖書には、主に二人のヤコブが出てきますが、十二弟子の一人、ゼベダイの子で、ヨハネの兄弟であるヤコブです。彼は、ヘロデ・アグリッパ一世によって殺され、殉教しました(使徒 12:2)。この手紙のヤコブは、十二弟子のヤコブではなく、イエス様の半兄弟ヤコブです。ナザレの会堂の者たちが、イエス様を見て、「彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。(マタイ 13:55)」と言いました。これらイエスの弟たちは、初めイエス様を信じていませんでした(ヨハネ 7:5)。けれども、イエスさまが復活されて、ヤコブに直接、現われてくださったようです。パウロは、コリント人への手紙に、「その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。(1コリント 15:7)」と書いています。ヤコブはこの時から信者になり、またキリストの弟子となりました。

ヤコブの手紙には、イエス様の山上の垂訓の言葉が色濃く反映しています。試練をこの上もない喜びとみなしなさい、というのは、迫害を受けたら大いに喜びなさいとイエス様が言われた言葉が反映されています。完全な者となるという約束(1:4)は、知恵を求めなさいという勧めは、「求めなさい、そうすれば与えられます」という御言葉の反映です。兄弟をさばいてはいけない、という言葉もできますが、これもまたイエス様が「さばいてはいけない、さばかれないためです」と言われた言葉の反映です。ルカの福音書を読みますと、イエス様は一度だけでなく、二度以上、同じ教えをしておられましたが、ヤコブは未信者であった時も、これらの言葉を聞いていたのでしょう。

そして、十二使徒の一人ヤコブが殉教してから、おそらく同名の、イエス様の半兄弟のこのヤコブが教会の指導的役割を果たしたのではないかと考えます。天使によって牢屋から出たペテロが、マルコの母の家にいる人々に対して「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください。(12:17)」と言いました。そして、エルサレムにある教会で使徒 15 章ですが、パウロとバルナバが割礼を受けてモーセの律法を守るから救われると言った者たちと激しい議論になり、それを使徒ペテロが立ち

上がって信仰による救いを語り、それからヤコブが立ち上がって、聖霊と教会によって異邦人を悩ましてはいけないという判断を下しました。ヤコブが、エルサレムにおける教会の指導者となりました。このことはパウロも認めており、ガラテヤ 2 章 9 節で、エルサレムにいる主だったとみなされている人たちとして、ペテロ、ヨハネ、そしてヤコブの名を挙げています。そして使徒 21 章で、エルサレムにやって来たパウロを大きく受け入れ、けれどもパウロが律法を破るようにユダヤ人に話しているという謂れなき噂が立っているから、神殿で儀式を守るのを見せましようと言っています。したがって、ヤコブはユダヤ教、殊にパリサイ派のユダヤ人が数多くイエスを信じていった中で、彼らに牧会していた指導者でありました。

そして聖書にはありませんが、ヨセフによるとヤコブは、大祭司の命令によって紀元後 62 年に石打ちで殺されています。ローマ総督がフェストから新しく代わろうとする時に、アンナスの息子アナヌス(Ananus)が、ヤコブが律法に背いていると言って彼を処刑するよう命じたとのこと。ヨセフはキリスト者でなく自身パリサイ派であったにも関わらず、この処刑を好ましく思っておらず、このせいで 70 年にエルサレムが破壊したと述べている程でした。ヤコブはそれだけ正しい人、聖い人で、多くの者たちから敬われていたようです。

2B しもべ

その彼が、自分のことを「神と主イエス・キリストのしもべ」と言っています。「しもべ」のギリシヤ語はデューロスであり、奴隷、しかも最下位の奴隷を指しています。イエス様の半兄弟なのですから、ヤコブは自分が誰なのかを、よくわきまえていました。自分の環境が、自分の霊的位置とは何ら関係がなく、ただ、主の僕という認識のみがあったのです。同じように、イエス様の半兄弟ユダは、「ユダの手紙」をかきのこしていますが、「イエス・キリストのしもべ(1 節)」とのみ書き記しています。自分を持ち上げず、主の前でへりくだった僕であることに徹しました。

3B 国外の十二部族

そして、「国外に散っている十二部族へあいさつを送ります。」と言っていますが、ヤコブは、エルサレムやユダヤ以外の、世界中に散らばっているユダヤ人信者にこの手紙を書いています。ここに、この手紙がなぜ試練における忍耐を教えているのか、また貧しい人々に対する神の関心をこの手紙で教えているのか、その背景がよく表れています。

ヘブル人への手紙は、教会が誕生してからしばらく経ってから起こっていた信者への迫害を取り扱っていたと思いますが、ヤコブの手紙は使徒の働きにもある、初めての大規模な迫害、つまりステパノの殉教の後のものであると考えられます。「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。(使徒 8:1)」このようにして、散らされたエルサレムの教会の聖徒たちに対して、ヤコブが牧会的配慮から手紙を送ったものと考えられます。

そして貧しい人々への配慮については、基本的に散らされた人々も、またエルサレムの中にいる人々も、基本的に貧しい人々であったことが考えられます。パウロとバルナバがアンテオケにいた時に、飢饉が起こって、それでエルサレムに救援物資を送ろうとしている姿を見ることができます(使徒 11:28-29)。そしてパウロの手紙には、たくさんエルサレムにいる貧しい兄弟のために醸金しようとする動きを読むことができます。

ローマ 15 章 27 節には、「異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。」とあります。私たちは、霊的なもらいものをした人々は、たいてい物質的にも豊かである場合を見ますね。アメリカの教会から霊的にもらいものをしていますが、物質的にも支援を受けます。発展途上国から霊的なもらいものをするのがほとんどないのですが、当時は違いました。ローマ帝国にとっては、片田舎に過ぎなかったユダヤ地方で聖霊が降られたので、貧しいところから豊かなところへと福音が動いていったのです。

そしてネヘミヤ記 5 章で、私たちは貧しいユダヤ人が叫び声を挙げたところを最近学びました。なぜかと言いますと、豊かなユダヤ人が彼らに物を貸して、その利子を取り、彼らをさらに苦しめていたからです。おそらく、散らされたユダヤ人の間でもそのようなことが起こっていて、豊かな人々が信仰を持っていると言っても名ばかりであったり、信仰が幼かったりして、貧しい兄弟たちをないがしろにしていた可能性があります。そこでヤコブは、富む者たちに対する警告の言葉をたくさん書いています。

ところで、ヤコブが生きていた時代に、イスラエル十二部族が存在していたのは興味深いです。キリスト教会の中ではやっている、「失われたイスラエル十部族」という説があります。それは、アッシリア帝国が北イスラエルを滅ぼしたときに、捕え移された十部族は、歴史の中で消えて行ってしまった、というものです。そして、日本人がその失われた部族であるかもしれないとか、アングロ・サクソン人種は、失われた十部族であるとか、果てしのない迷宮入りの議論をしている人たちがいます。しかしアッシリアに捕え移されたのは、一部であり、多くの者、特にヤハウエなる神を信じていた人々は、南ユダに移り住んでいました。彼らは、南ユダのイスラエル人とともに、後でバビロンに捕え移され、またユダ族とともに、バビロンからエルサレムに帰還しています。そして、ヤコブが生きていた時には、だれがどの部族であるか、その区別が付いていたことが分かります。

2A 忍耐を働かせる信仰 2-4

1B 喜びの態度 2

2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。

先ほど話しましたように、試練に耐え忍ぶことがヤコブ書全体で背後にある教えになっています。終わりで、「主が来られる時まで耐え忍びなさい。(5:7)」という言葉で締めくくりが始まるからです。困難を耐え忍び、魂が練り清められる中で成熟へと向かうのですが、その霊的成熟に向かわない

とどのような事が起こるのか、という問題をヤコブは後で取り上げていきます。

「私の兄弟たち」と言っているのが良いですね、ヤコブの愛の勧めを感じます。そして、「さまざまな試練」と言っていますが、試練はあらゆる分野に及ぶという点です。私たちは、信教の自由が守られている国に生きているから試練を受けていないといたらそうではありませんね、迫害だけを考えがちですが、最近、エステル記の説教でお話ししましたように、自殺する人が毎年三万人ぐらいという恐ろしい時代に今、入っています。キリスト者と言えども、いいえ、キリスト者になったがゆえに、霊的な歩みが、悪の勢力によって押しつぶされる目に見えない迫害があります。

そして、「この上もない喜び」と言っています。どういうことでしょうか？自虐的になって、試練や困難を受けた時にそれ自体を喜ぶのでしょうか？違いますね、ヘブル書 12 章で学びました、「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。(11 節)」当然、悲しいのです。しかし、このことによって訓練を受けて、平安な義の実を結ばせることができるという将来を見ることができます。だから喜ぶことができます。この試練に神の良い目的があるからです。

同じように、迫害下にいたユダヤ人信者に書かれたと言われているペテロ第一の手紙にも、冒頭でこうあります。「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならぬのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。(1ペテロ 1:6-7)」やはり、試練の中にあっては悲しまなければいけないのです。けれども、火を通して精練される金よりも尊いものになる。そしてイエス様が戻ってこられる時に、それが称賛と光栄と栄誉に至るものになる、ということです。だから、ペテロは続けて、言葉に尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びに満ちていると言っています。ヤコブも同じことを話しています。

2B 全き者 3-4

ヤコブは、試練の積極的意味を、忍耐と霊的成熟の中で説明しています。3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

「信仰が試される」とあります。先ほど話しましたが、私たちの信仰が海面のような表面的なものではなく、深海にあるようなものが本物であることを教えるために、そうした試練を神は与えられます。私たちが滅ぼすためではなく、私たちの真価を試すために与えられます。主がイスラエルに四十年間の荒野での行程を与えられたのは、「それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。(申命 8:2)」とあります。神が私たちの心を知りたいから、試すわけではありません。神は初めから、私たちの心の内に

あるものを知っておられます。むしろ、私たちが自分自身を知るために、神が試練を通して明らかにして下さるのです。

私たちは以前、宣教地で現地の人たちに日本語を教えていたことがあります。残念なことに、宿題やテストでカンニングをしていた学生たちが何人かいました。私たちはいつも残念に思っていました。「これは、先生のためにやっていることではないのに。」自分たちがどれだけの能力を身に付けられたか、それを量るためのものであり、彼らのためなのです。ところが、先生の前で良く見せなければいけないと思ってしまうのです。霊的に私たちはこれを犯してしまいます。信仰が試されるからこそ、今、自分がキリストとの歩みの中でどこに立っているのかを、はっきりと知ることができます。そして自分が、見かけの信仰ではなく、神の与えられた本物の信仰がどれだけの量りになっているのかを見極めることができます。

そして信仰が試されると、「忍耐が生じる」とあります。パウロが話しました、「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5:3-5)」

パウロも、また使徒ペテロも第一の手紙 1 章で、やがて来る神の国にある大いなる栄光を見て、喜んでいっていると言っています。けれども、その大いなる栄光を信仰の目で見ている中で、その過程で患難や困難に会います。そうすると私たちは落胆するのです。「こんなにすばらしい神の国を喜んでいのに、どうしてこんな試練に合わなければいけないの？これは忍耐しなさい、とあるから、ひたすら我慢するのだ。」と思うのです。いいえ、パウロがここで言っているように、忍耐の先にあるのは最終的には希望なのです。私たちに神の与えられた幻は、今の世の困難によってますます清められて、希望へと昇華されていくのです。

思い出してください、アブラハムが神から大いなる約束を受けて、それを信じました。そしてイサクを捧げるという試練によって、その約束がますます確かな言葉となりました。ヤコブを思い出してください、彼は天からのほしごの夢を見ました。その強烈な神の栄光を見て、その後で待ち構えていたのは、ラバンによっていじめられることでした。ヨセフを思い出してください、彼は夢を見ましたが、その夢の実現は兄によって売られ、エジプトでは牢屋に入れられるという苦しみを通して、確かなものとなりました。だから私たちは、聖書から神のすばらしさを知るだけでは不十分で、今、生きている世の中で、どのようにこの希望の中に生きていかなければならないかを、知恵を尽くして知っていかなければいけないのです。

そして「その忍耐を完全に働かせなさい」というのは、途中であきらめてはいけないことを意味しています。忍耐を全うしてください、ということです。そして、「あなたがたは、何一つ欠けたところの

ない、成長を遂げた、完全な者となります。」とありますが、ここの「完全な者」とは、完熟したと言いかえると分かり易いでしょう。全き成熟に向かう、ということであります。全人的に健康なすがた、健全さを表しています。

「何一つ、欠けたところのない」と強調していますが、キリスト者の生活は全人格的です。心や思いの中で主をあがめるのですが、その思いが自分のあらゆる生活の場面で生かされ、表れてくるということです。先ほど言及した「日本のキリスト教」の著者は、神学を学ぶために米国に留学する時に、牧師である父から「博士号を取得するためでなく、クリスチャンの家庭から学んできなさい。」と言われたそうです。そうなのです頭で神学が分かるよりも、アメリカのキリスト者の中にある、重厚なクリスチャン生活が、その過程の中で見る可以看到ということです。そして、私たちは一人一人、すばらしい特権に預かっています。試練を今、受けておられるのなら、それに耐え忍ぶところに、渦中にいると分からないかもしれないですが、必ず信者の手本となるような、キリスト者としての生き方を人々が見ることができるようになるのです。

3A 知恵を求める信仰 5-8

そして次に大事な、「知恵を求める」という勧めです。

1B 惜しみない神 5

5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

5節が2-4節のすぐ後にあることに目を留めないといけません。私たちは、「知恵」と聞きますと、上手に何かやりくりする手法のように聞こえます。しかし、そうではありません。試練に会うとき、その中でなおのこと神の御心を行なうことのできる知恵であります。1章後半に出てきますが、御言葉を聞くだけでなく、それを実践することのできる力であります。箴言を読めば、私たちの考える知恵が神の知恵とはかなり離れていることに気づかれるでしょう。

知恵は知識の適用です。神についての知識を持っているところから、具体的な状況においてその知識をいかに適用するのか、その知恵について神に願いなさいということであります。それは、その試練をいかに免れるかというような類いではもちろんなく、完全な者とさせる、キリスト者としての成熟の中での知恵であります。神に求めることもするし、また互いに教える時にも行ないます。「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(コロサイ 3:16)」互いに励ます時に、単に「大丈夫だよ」と繰り返すのは知恵がありません！神の御心について、何が完全で、何が正しいことなのかを、御言葉によって聖霊の賜物によって啓示を受けて、それを語るのです。

時には、「祈りましょう」というのが知恵である場合があります。私は、苦しみの中にいる人に対して、クリスチャンが、「そんなに悲しんではいけないよ」「こうしているから、こんな苦しみがあるんだよ」と、御言葉を使ってクリスチャン的に、教科書的に答える時に困ってしまいます。たぶん、その苦しんでいる兄弟あるいは姉妹をさらに苦しめているだけだからです。教会の弱さに自分がその痛みを共有して共に祈っている中で、その苦しみに同情している中で、なおのこと語るべきことばがあるか模索します。多くの場合、「祈っている」だけで終わるのです。なぜなら、神ご自身の臨在が答えそのものであることがあるからです。苦しむヨブは、神のご臨在が答えでした。

そして、きっと、とありますが、必ずと言ってよいでしょう、与えられるという約束があります。それは、神が「惜しげもなく、とがめることもなくお与えになる」だからです。これは、ヘブル書で学んだ、「恵みの御座」につながるものがあります。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル 4:15-16)」

2B 疑わない態度 6-8

6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。7 そういう人は、主から何かをいただけたらと思ってはなりません。8 そういうのは、二心のあつた人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。

この手紙は信仰が試されるどころから始まっていますが、知恵を求める時も信仰を働かせて求めます。神が確かにご自分の約束を、今、この状況にあつて与えてくださると信じる信仰です。アブラハムの場合は、イサクを捧げる時に、黙々と、疑うことなく、モリヤ山に向かう準備をしました。あのような揺るぐことのない信仰です。対して、ヤコブがエサウに会わなければいけないと聞いて、宿営を二つに分けて、恐れて主に祈り、それから自分の前に行く贈り物を用意して、最後にヤボクの渡しで御使いと格闘しました。約束に何とかしがみついています。けれどもエサウから危害を受けるといふ疑いが生じていたので、ここにあるように風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようになってしまいます。しかしヤコブも、神の知恵が与えられました。それは、太ももの関節が外されるという知恵です！このことによって、彼は弱くされて、エサウに会うことができたのです。

例えば私は、ある方のツイッターですばらしい内容を見つけました。家族伝道についてですが、彼は次のような御言葉を書いていました。「伝道に関して、2 つ握りしめているみことばがあります。①ヨハネ 5:14-15 何事でも神の御心にかなう願いをするなら、神はその願いを聞いて下さること、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願うことを神が聞いて下さると知れば、神に願ったそのことは、すでにかなえられたと知るので。その神の御心について書かれてあると思うのが、②ヨハネ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。聖書の神様は

決して約束を反故にされる方ではなく、すべての預言を成就してこられました。ですから、神が望んでおられることを祈り求めているのだから、みことばを通して約束して下さったことは必ず成就して下さるはずだ、という信頼のもと、伝道に当たっています。」(twitter.com/kta_gby392)ある時に、まったく信じそうもない反応をした時には揺らいで、良い反応をした時は御言葉を信じて、そのような態度でいると、与えられるはずの知恵も与えられません。信じて疑わないのです。

私たちは、聖書は66巻、靈感を受けた誤りなき神の言葉であると告白しています。ですから、頭では信じていても、実際の場面では、これまでの世の考え方、哲学で反応してしまいます。これを矯正してくれるのが知恵です。私は、ある兄弟姉妹に「日本人は根っこからリベラルかもしれない。」と言いました。つまり、自分の心の中でこれが真理だと思うものは受け入れるが、都合の悪いものは心の中で無視して、無いものとしている、ということです。だから、頭だけで知識を整理して、生活のど真ん中でその知識が生かされませ遠。聖書全体を受け入れて信じるというのは、一部ではなく全てを受け入れるのです。後日、2章で律法全体でなく一部だけ守っていることの誤謬が書かれているところを学びます。

4A 貧しさにある信仰 9-11

1B 高い身分 9

9 貧しい境遇にある兄弟は、自分の高い身分を誇りとしなさい。

信仰の試練から知恵を求める、そして貧しい者と富んだ者の話をする、一見ばらばらの勧めのように思えます。実はつながっています。ユダヤ人信者たちが、迫害を受けているということもあって、貧しい境遇の中にあるとも言えました。そこで、富んでいるユダヤ人もいた中で、ユダヤ人信者の共同体の中でも、富に惑わされていく傾向があったようです。

しかし、ヤコブは明確なイエス様の教えを伝えています。「心の貧しい者は幸いです」という言葉です。経済的な貧しさが霊的な訳ではありません。しかし、経済的な貧しさには、しばしば霊的な渴望が大きくなります。そこに、信仰の豊かさが出てくるのであり、ゆえにその人は高い身分の人なのです。イエス様は、金持ちとラザロの話もされました。事実、ハデスにおいて乞食ラザロは、アブラハムの懐にいました。

2B 過ぎ去る富 10-11

10 富んでいる人は、自分が低くされることに誇りを持ちなさい。なぜなら、富んでいる人は、草の花のように過ぎ去って行くからです。11 太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、その花は落ち、美しい姿は滅びます。同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです。

富は人々を高慢にさせます。ラオデキヤにあった教会のようになります。冷たくもなく、熱くもありません。なぜなら、自足しているからです。自分には不足がないと自負しているからです。これが災いであるということを、ヤコブはここで話しています。ヤコブの手紙は例えが多いので分かり易いですが、ここでの草の花はイスラエルの風景です。3-4月に花がイスラエルに咲き乱れます。しかし、5月になると熱風が吹きます。それできれいな花は一気にしおれてしまうのです。富んでいるものがそうになってしまう、ということです。

ここにも試練の大きな霊的意義があることがお分かりになるでしょうか？試練がなければ、安泰していれば、私たちは富んだ者と同じように惨めな者です。それがいつかなくなるのに、それに拠り頼んでいるからです。富について、ヤコブは続けて手紙の中で話していきます。

そして12節からは次回学びますが、試練の次に誘惑について学びます。試練は外側から来るものですが誘惑は内側から来ます。そして苦しみに会うときに、私たちは自分の欲望によって罪を犯したいという誘惑も来ます。